

素晴らしき哉、永遠の映画魂ここにあり！

あゝ、懐しや！剣戟の響き・人情の舞台に……胸を打つ雄姿の頂点へ夢つなぐ『阪妻・千恵蔵』傑作2篇！



千恵蔵の 暎の母

昭和六年千恵蔵プロ作品

主演 / 片岡千恵蔵
山田五十鈴
監督 / 稲垣 浩
原作 / 長谷川 伸



監修 / 稲垣 浩
構成 / 向井 寛
弁士 / 松田春翠
製作 / マツダ映画社

噺

真大弁士



阪妻の 雄呂血

大正十四年阪妻プロ作品

主演 / 阪東妻三郎・森 静子
総指揮 / マキノ省三
原作・脚本 / 寿々喜多川 幸三



いか。平三郎の心にはもはや一点のくもりもなかった。白刃を抜き放ち、数知れぬ悪人たちを敵にまわして、斬る斬る斬る。平三郎の剣は悪のすべてを打ち倒し、やがて群衆の嘲罵を浴びながら、捕手の繩に引かれて行くのだった。



瞼の上下をひとつに合わせ、そこに浮かびあがる母親の面影。幼いころよんどころない事情で、その母と生き別れした番場の忠太郎は、やくざ渡世に流れてはや三十路の聲。たとえ歳月は重ねても母恋しの心は変わらず、風の噂をたよりに江戸へ七里の旅。その途中、飯岡助五郎の身内の者に狙われていた弟分の半次を助け、無事母親の許へ帰してやった忠太郎は、自分も母に合うために旅を急ぐ。そして江戸で母を訪ね歩くこと春秋を二度。ようやくめぐり逢うことができた母親は、柳橋でも名の通った料亭「水熊」の女将お浜よろこび勇む忠太郎だが、それに反してお浜の冷たい仕打ち。自分の子とは言え、やくざ者の忠太郎に、いまの裕福で幸せな暮らしを邪魔されたくなかったのか……。お浜は忠太郎をゆすりたかりと罵って突き放つ。これが

永の年月、さがし求めた母親なのか。あまりの失望に打ちのめされた忠太郎は、そのまゝ「水熊」をあとに、吹雪の中を何処ともなく去って行く。こうした母と子のいきさつを知ったのは、忠太郎の妹お登世。このお登世は、お浜を諫

若人よ「噫 活弁大写真」を見給え

松田 春翠

日本の無声映画は活弁（活動写真弁士・映画説明者）が入り、伴奏音楽がついて上映されていた。無声ではないのである。だから活弁も音楽もなく、フィルムだけ上映して見ていたのでは正しい鑑賞方法とはいえない。何故なら、当時の制作者は、弁士や音楽がついて上映されることを意識して当然計算の上で制作されたからである。この場面は主人公の心理描写を弁士にやらせよう、ここは音楽だけで情緒を出して……と、一見不必要に思える様な画面でもそれだけの意味があるわけである。それを知らない人が見ると、あのシーンは少々長すぎるのではないかと。この監督は巨匠などといわれていないが、若い時はこんな演出したのか？ などと思われつたり正しい上映形態をとらないために、誤った継承となることも考えられる。

そこで本篇「噫 活弁大写真」の制作意義があるのである。特に本年は日本映画渡来八十年。無声映画鑑賞会創立十五周年の記念すべき年でもあり、昔に近い上映形態で全国の映画ファンにこらんだきたたく、活弁入り、伴奏音楽入りで、当時を再現した。日本映画界で初めて制作された本格的な活弁大写真なのである。特にこの映画が昭和51年の現代制作されたことを映像に残すべく、現代の東京と昔の東京。名場面の今昔をフオークソングで綴り、本篇は現在保存されている無声映画の中では、完全保存に近い国宝級の二作品全巻が当時の彩色調画面で挿入されているのである。サテ見どころ、というより、まず考えていただきたいのは、挿入された映画原画は今から五十年以上も昔に制作されたものであることだ。しかも、制作者は監督も、俳優も全て20代の青年である。映画も若かった。撮影、現像技術、機械セット全てで今では想像もつかない程幼稚な時代に、自分たちの映画を作り上げた記念碑的作品である。その情熱は音のないサイレント映画の画面の中に漲っ



松田 春翠（本名：松田美知夫）

東京本所業平にて、初代春翠の末子として生まれ、幼くして少年弁士となる。昭和二年本所業平館で初舞台以来、無声映画完全消滅の昭和十三年まで、千葉支那館などで映画

め、すぐにでも忠太郎を探しに出ようと涙ながらに説くと、母をつれて夜の吹雪の中へ。やがて降りしきる雪の中で再会する忠太郎とお浜、お登世。三人はさめ／＼と泣いて抱き合うのだった。

ており、その青春のよび声は私に、ハッキリと聞える。五十年を経た今日、今の時点で見て何等することは無い、むしろ現代以上フレッシュな感じさえ想わせる素晴らしい映像美も諸君はなんとも見給え。特にこの時代を知らない若い青年諸君に呼びかけたい。『雄呂血』木を背に斬りまくる飯妻が、移動して寺の裏門に、六尺棒、サス又、熊手、捕物道具をふるに使う群がる役人相手に斬って／＼斬りまくる。門前から土堀へ大引は引き、そして俯瞰で去る。カメラは、寄り、あるいズームレンズもなければ、クレームもない。これがワンカットでおさめられている。これがこの長いカットを飯妻は凄まじい大殺陣を見せる。またカメラの捕手その他一同が皆うまい。機械技術に頼り過ぎ賑りまわされている現代人にどれだけこのナマの迫力が出せるか？ テモ隊の大乱斗の中に手持カメラでも持ち込まない限りこの新鮮さは出ないだろう。

権力横暴な当時としては破天荒な寿々喜多呂九平のシナリオ。反逆精神一ぱいで、時代の権力、不義、不正に対する止む止めぬ抵抗と憤りが画面にあふれた。独立プロの夜明けであり、時代劇の原点である。千恵プロの「瞼の母」にしても御大千恵蔵が27才、稲垣浩25才、山田五十鈴はまだ15才の少女で、これだけのお色気を出している。「雄呂血」の少女より六年の歳月、非常な進歩を見せているが、各所に独立プロの苦勞のあとが見える。ラスト近くの雪の中。悪者二人が待伏せているところへ、忠太郎が歩いてくる。セツがせまくてロングが撮れない、一番奥の書き割りの絵の前に忠太郎と同じ姿の人影を使い、次に子役を使い、近づいたところで初めて千恵蔵の忠太郎が撮影された。と、稲垣監督が話してくれた。すべて手作りのきめ細さは、愛する映画にかけたという青春の詩情で一ぱいである。まず20代の当時の映画青年が、制作し世に出したということである。そこに意義があり映画の歴史がある。

「噫 活弁大写真」を五十年を経た今、敢えて制作公開する。ここに映画の歴史がある。同年輩の青年諸君。若人よ、噫 活弁大写真を見給え！

説明を続け、出征、昭和二十二年復員後、再び活動写真ともにも歩み、現在まで映画説明を続ける最後の説明者。昭和二十三年に二代目春翠を襲名。この年、全国映画説明者競演会に入賞。一九六三年度ミリオーン・パール賞受賞。古典映画フィルムの収集家で、現在無声映画鑑賞会々長。立大中退、二男三女の父。大正生まれ。

特別鑑賞券発売中

¥800 (当日大人1,000円(の処) 学生900)

日劇文化 (201) 2111		有楽町日劇地下		
平日	11:00	1:35	4:15	6:55
日・祝日	10:40			

5月1日(土)より
ロードショー

あらゆる芸術ジャンルにわたって、いま世界的に古典復活ブームの最高潮。昔日の優れた名作の数々が鮮烈に甦り、人々の心を捉えている。こうしたクラシック愛好の気運のなかで、映画のふるさととも言うべき、懐かしき無声映画が輝かしきスポットライトを浴びて華麗に開幕のベルを鳴らす。日本映画界が協力して放った「阪妻映画祭」の予想をはるかに超える大ヒットについて、古き良き名画の復活、しかも特筆の活弁ネメ登場である。サイレント映画時代を知る人々には、なつかしさを、またそれを知らない若い世代には、限りない興味を、それ（く）かき立て、せずにはおかない貴重な興行と言えよう。

無声映画鑑賞会十五周年記念として製作されたこの作品は、現在では国宝的存在となっているかつての名弁士松田春翠が並ならぬ情熱を注いで完成したもの。前半に阪妻プロ作品「雄呂血」、後半に千恵プロ作品「嘘の母」と文字通り無声映画の巨峰二本を揃えて、しかも当時公開したものと同様、ブルー、セピアなどの美しいカラー処理とモノクロームで仕上げている。そしてさらにテラックスなのは、その本編二本のアプロロクに、昔なつかしい活弁時代の光景を、貴重なニュース・フィルムと楽しい再現によって呼び戻したサイレント映画のあの日あ頃のムードを横溢させて、ファンを誘っていること。そのアプロロクに挿入される無声映画名作群のハイライト・シーンの数々のフラッシュ・バックもまた楽しい見ものとなっている。

前半の「雄呂血」は、大正十四年、独立プロをおこした阪妻プロの第一回作品。享保の

時代を背景としたこの作品は、激しい正義感の持主ゆえに迫る青年武士の運命の変転を、悲劇的なタッチで描く阪妻三郎の不朽名作。権勢をかさに着る家老の子息と闘着を起したために、閉門を申し付けられて、流浪の旅へ出た若い侍が、その先で、さまざまに争いにまき込まれ、ついには、ならず者として世間から非情な扱いを受けるに至る。そしてラスト、かつて心を寄せた女のために、悪の群を敵にまわして白刃をふるい、その悲憤はあまりに血闘のすえ、多数の捕手に捉えられて行く。映画はこうしたストーリーを、波乱万丈のドラマチックな展開でつらぬき、重厚にして息もつかせぬ剣戟代表傑作としての迫力を叩きつけて、見る者を唸らせる。

後半「嘘の母」は昭和六年度の千恵プロ作品。幼いころ事情があつて母親と生き別れ、やくざになった番場の忠太郎が、風の噂をたよりに江戸に上り、苦勞の末ようやく母と妹にめぐり会うという極め付の人情劇。原作は股旅もの巨星・長谷川伸の最高傑作、脚色、監督は名匠稲垣浩。配役陣は、番場の忠太郎に扮して主演をつとめる時代劇の大スター片岡千恵蔵、これにつづいて山田五十鈴、浅香新八郎、常盤操子などが共演している。単に母子の人情ドラマの域にとどまらぬその劇的迫力、人間描写のきびしさ、秀逸さは、まさしく日本映画の歴史にひとときわ光彩を放つ存在としてゆるぎない名作。永く人々の記憶に刻みつけられるにちがいない傑作サイレントである。

なお全篇に亘つて、監修に稲垣浩、映画説明に弁士松田春翠がそれぞれ、取組み、いま望み得る最高の無声映画復刻に全力を注いでいる。製作はマツダ映画社。



阪妻の雄呂血

享保の頃、或る小さな大名の城下に、松澄永山という漢学者がいたが、その一人娘の奈美江は藩中一の美人として知られ、若い侍たちの憧れの的になっていた。久利富平三郎も奈美江に心よせるそのひとり。だが永山誕生日の酒宴の席上、日頃から権勢をかさに着た家老の息子と闘着を起し、腕力沙汰になったことから、閉門を申し付けられ、その上、不運にも土地を追われる身となつてしまった。

己れの行動は間違っていない筈だが……、今では仕官もできぬ惨めな流浪の旅。そして一年後、ある城下で知り合った吉野川という料理屋の娘お千代に一条の光明を見出したが、またしても不運。とるに足らぬ喧嘩の巻添えを喰い、捕手に捉えられて入牢の憂き目に合つた。

やがて二月後、お千代恋しさに吉野川に姿を見せた平三郎だったが、牢で知り合った

二十日鼠の幸吉という男と酒を飲み交していた時、店の客にからまれて、たゞ仲裁に入っただけというのに、再び捕縛され牢に叩き込まれてしまったのだ。

あまりの理不良な世間の扱いに、怒りを押しこめきれない平三郎は、遂に牢を破つて逃げお千代のもとに駆けつけたが、女はすでに他人の妻。絶望した平三郎は、追手から逃れるために、刺客赤城治郎三を頼つて行つたが、なんとこの治郎三は、義侠の仮面をかぶつた大悪人であった。

見えない運命の糸は、だれが操っているのだろうか。治郎三とその手下共が、病に疲れた通りすがりの夫婦着を襲つて、その病夫から無理矢理に美しい妻を奪い取ろうとしたが、その美しい女こそ忘れもしない奈美江ではな

雄呂血

地蔵屋工

- ▼スタッフ▼
- 総指揮……………マキノ省三
 - 原作脚本……………寿々藤 昌平
 - 監督……………二川 文太郎
 - 撮影……………石野 誠三
 - 舞台装置……………川村 基平
 - 現像……………田村 太一郎
 - タイトル……………坂本 義徳
 - 電気照明……………奥 貫一
 - 助監督……………村田 正雄
 - ……………宇沢 芳國
 - ……………稲葉 鏡児
 - ……………岡本 勝人

- ▼キャスト▼
- 久利富平三郎……………阪妻三郎
 - 松澄永山……………関 操
 - 奈美江……………環 歌子
 - 江崎信之丞……………春路 謙作
 - 浪岡新八郎……………山村 桃太郎
 - 二十日鼠の幸吉……………中村 夢之助
 - にらみの猫八……………嵐 しげ代
 - 赤城治郎三……………中村 吉松
 - 薄馬鹿の三木……………安田 善一郎
 - お千代……………森 静子

母の叫

即忠の場番

- ▼スタッフ▼
- 原作……………長谷川 伸
 - 脚色……………稲垣 浩
 - 監督……………寺川 千秋
 - ……………石重 満
 - ……………本 秀雄
 - ……………森山 正則
 - ……………岡本 公策
 - 美術……………平松 智恵吉
 - 照明……………段下 岩太郎

- ▼キャスト▼
- 番場の忠太郎……………片岡千恵蔵
 - 金町の半次……………浅香新八郎
 - 突き腰の善八……………成松 和
 - 宮の七五郎……………森田 一
 - 板前の善三郎……………香川 良介
 - 鳥羽田要助……………林 誠之助
 - 水熊のお浜……………常盤 操子
 - 娘・お登世……………山田 五十鈴
 - 半次の母おむら……………安川 悦
 - 半次の妹おぬい……………春日 秀子
 - 銭を乞う老婆……………津野 ふみ子
 - 老夜鷹おとら……………沢村 春子

